



實 演 童 話

# 頓 智 軍 曹

眞 野 寛 道

去年の暮に、支那の太倉ミ云ふ所に向つて前進した〇部隊の〇〇部隊に、永坂ミ云ふ落着いた、頓智のある

賢い兵隊さんがありました。〇〇部隊は敵に隠れ、苦戦をし乍ら太倉の真近か迄やつて來ました。前は大きな山です。西も、東も、皆山です。此前の山を一つ越せば敵陣です。さうやら山の上近く迄やつて來た部隊長

「突込メ！」

ミ、山の上に頭を出すミ、

「バン、バンくくく、カタくくくズドン」

「ハッ」ミ、頭をひつこめ、ソーミ敵陣を覗くミ、鐵砲が  
一列にズラーミ並んで火を吐いて居るのです。花火の様な、細い長い火、敵が打つ鐵砲の火です。でも、しばらくで止まりました。今だ!!ミ山に登るミ「バンくくく、カタくくく、ヒューンくく」

さうしても上に出られないのです。一寸でも頭を出せば

やられるのです。ミ云つて、其處を取らねば味方は、さうなるかわからないのです。

「アー困つたなアー」

時計は十分廿分ミ過ぎて行きます。部隊長は腕を組んで考へました。其時、上の方で、「ブーン」

「オー飛行機だくく。有難い。でも味方かな、敵かな」飛行機はだんくく大きくなつて來ました。

「オー日の丸くく味方だ、味方の飛行機だ」

兵隊さん達小躍りして喜びました。「早く爆撃してくれないかな」不安ミ喜びの目で見て居るミ、敵の高射砲は、しきりに火を吐き始めました。ミ、味方の飛行機、尾から眞黒な煙、

「アッ、やられたナ？ 残念！」

キリく廻ひ乍ら落ちて行くのです。

「アーく駄目か」……………

ミ、黒い玉コロがボロツ、ボロツ、ボロツ飛行機は煙を止め元來た方へ、忽ち起る大音響、「ゴーン」、「ゴーン」

「ゴーン」

「オツ、今だア」「突込めッ!」

部隊長は刀を抜いて第一番に、次で一人、二人、三人、

「ワァーッ」「ワァーッ」

之れを見た支那兵、

「ヒャー逃けるよろしい〜」

鐵砲擔いで、スタコラ〜、さしもの大軍も完全に敗れました。しかし戦争はこれからです。占領後が大事なのです。部隊長は皆を集めました。

「集れ!皆御苦勞、當隊は更に進撃だ!」

「永坂軍曹、お前は部下十六人ミ共に、此處に残り〇〇を守るべし、ソレツ」「オツカケロー」

ミ、全部行つてしまひました。今はもう〇〇には、軍曹始め十七名居るのみです。先づ第一に、支那の良い人達に、お米が無くて困つてゐる人にはお米を、お金のほし人にはお金を、ミ可愛いがるので、皆大喜びです。

「日本兵隊さん、神様ある、神様、神様」

ミ手を合せ涙をこぼし嬉んで、すぐに仲良くなりまし

た。日は経つて十二月五日の夜がやつて來ました。此晩は珍しく眞暗な晩です。

「集レツ」

永坂軍曹は、働いてる兵隊さん達一同を集めました。

「番號!」「一、二、三、……十六」

「皆御苦勞だつた。疲れたらう!今日はこれで終了にする。處で今夜は十二時迄、俺が皆に代つて起きてゐる。十二時から二時間交代、皆代る〜起るんだぞ、サア、此間に早くゆつくり休め、休め」

隊長の情深い言葉に、一同は傷の痛みも、晝の疲れも、何もかも忘れてグッスリ寝ました。

「グーグーグー」

兵隊さん達は今頃、きつミあの楽しい故郷の夢、うれしい出征の時、可愛い子供の顔、旗、歌等の夢を見てゐるのでしょう。夜は次第に更けて時々白い粉雪がチラツ〜ミ、眞暗な闇に吸ひ込まれて消えて行きます。シンミした、寒い夜です。おまけに闇です。闇も眞暗な闇で、鼻をつまゝれてもわからぬ程です。

やがて伊藤、山中の二人が見張りに立つ番でした。眞暗な中に唯二人、シヨンボリミ、……終に六日の、午前

一時半も過ぎました。寒さは愈々加はり銃持つ手も凍りさうです。そこへ晝の疲れが出たのでしよう。コックリく、フラツくくくく。」「アツいけないく」ハツミ眼を醒して見廻すミ、隣のもう一人が、コックリく始めたと思ふミ、フラツくくく。」「イタツ、アーイタこりやいけない」鐵砲で顎を突いたのでしよう。こつやつて交互に居眼りをしてる時、丁時此頃を見計つてゐたのでしよう。敵の二百人程が、闇にまぎれて靜かに近づいて來ました。

「シツ！シツ！靜かにく」

皆手榴彈を持つて居ます。

「オイ恐いあるナ」

「ウンぶるくくく恐いあるナ、隊長後から進めく」

て、あれこわいのあるナ」

「ヒツくくく」「ゲラくくく」

「オイッ、誰か？」隊長の聲です。

「ゲッ……」

しばらくして又始りました。

「オイ日本兵隊強いあるナ」

「死んでも幽靈になつて出てくるある」

「ウーンブルくくく」

此時ナマ臭い風がペロー、

「ヒヤツークワバラくくく」

こんなにし乍がらも到頭日本兵の近くへやつて來ました。處が誰も居ないのです。いないのではなくて其處から、二、三米離れた所に、何にも知らずに寝てゐるのです。今しも見張りの二人「コックリく」ミ、其時「バー」急に四方が明るくなつた。

「オヤツ」

ミ目を見張るミ「ボーン、ボーン、ボーン」「アラッ？ララララ、」尙よく右方を見るミ、光の中に何かは知らぬが黒い者が、ムクくくくく、

「大變」ミ、飛び上るミ

「敵襲！敵襲！」

一目散に、叫び乍ら走りしました。

「スワツ」

ミ十六人の夢は破れた。ガバツミ跳ね起るミ劍付鐵砲に身を固め、早くも陣を布いて身構へました。突撃の時は迫つて來ます。「フト」永坂軍曹、前を見るミ、敵は二百に餘る大軍、味方十六人「ウーン」到底切り込んで

犬死するばかり、ミ云ふて此處を退く譯にも行かない。  
退けば味方は全滅です。

敵味方の距離は近寄つて來ました。二百、百、五十米

「オー、サウダ」

膝をボントミたゝいた軍曹、何を考へついたか、一人の後の方へ走つて行きました。やがて多くさんの支那人がやつて來ました。仲良しになつてゐる良い人達です。でも勿論鐵砲は打てません。

軍曹は何をするつもりでしょう？、此等の支那人を味方の左横に連れて行き、

「サア、オ前は馬、オ前は太鼓オ前はラツバ各人何でもよい金盃でも持つて來い」

ミ命令しました。皆喜んで色々のものが集つた。

「ヨシ、サアこれからだ。これからが面白いぞ、皆よく聞け！（ワン、ツー、スリー）で一緒に、馬を躍らし、太鼓を打ち、ラツバを鳴らすんだ。何も持たぬ者はワーッミ叫ぶんだ、ヨイカ」

「一、二、三」

それツミ云ふので

「ヂャンくくくトテトテ、トテター。ドンくくく

バカくくくニイーヒヒン、ワアーく」

「ヂャンくく、トテく、ドンく。バカくニイーヒヒン、ワアー」

「ヂャン、トテバカくニイーヒヒンワアーく」

さしもの敵兵もびつくり仰天、居ないと思つた日本兵？

「ソラツ出たツ、幽霊ダーオタくくく」

「ニゲロくくく」

鐵砲擔いで逃ける者、鐵砲捨てゝ逃ける者、スタコラく。

皆總崩れになつて逃げました。「萬歳！萬歳！」永坂軍曹の頓智で大勝利。皆躍り上つて喜びました。ミ云ふ話これでおしまひ。

ヒント  
〔昭和十二年十二月十日  
新愛知新聞紙上より〕

★ ★ ★

★ ★ ★